

君は友の恋人

形沢 励

郷里

「お前さん海、好きかい。」

「ああ、昔夜光虫だったからな。」

「星に負けじと光る虫かい。」

「そう、でもすぐに命は尽きてしまった。」

「おまえさん、寒い海はすきかい。」

「ああ、それからすぐくらげになったから。」

「それじゃあ寒くないとな。」

「でもすぐに命は尽きてね。」

「だが、海は家みたいなものなんだな。」

「そう、郷里さ

はしやぎ疲れた子供の帰る家

放浪と孤独を終えた恋のようなところさ。」

「おまえさん、次は何になるんだい。」

「わからない、でも流浪の命だろう。」

「海に戻ろうとは思わないかい。」

「戻らなくともいつも海の底だよ。」

かっこいい奴

「今日は出張しないんですか。」

「午後から」

「いつもいつも大変ですね。」

「何言ってるんだよ」

朝に昼に声かけられても

仕事に集中する色男

その娘の話を忘れたように

仕事に話が戻ってしまう

外にはあまた男が歩いて

独身上司がいるというのに

あああああ

あの娘はあんたに惚れている

それはたしょう無粋けど

あんたの前じゃあ輝くじゃない

「それ入社ときの服？ ガキっぼい。」

ほら、彼女行っちゃった。

昭和59年 MY詩集153号発表

とてもかわいい女の子

とてもかわいい女の子
白いドレスに
髪はカールで
赤い唇 薄化粧

君はかわいい女の子
小さな小指
滑らかな声
鳥のむくげのしなやかさ

とても恋しい女の子
優しさあまる
軽い足音
たずねてたたくかの扉

君はいとしい女の子
慈愛の光る
美貌のひとよ
ひと時ゆえの苦は永久に

ほろ酔い街道

恋の兆しが吹き荒れて
夢でお医者に見てもらおう
「ううん、高鳴る心臓
移植手術が必要だ」

かくして人工心臓胸に入れ
ちょっと運動しただけで
電池切れのブザーがさわぐ
急ぎぬれた街道を突っ走る

街路樹は赤い紅葉
白バイが医院の前で邪魔をする
「助けてくれ死んじゃう。」
医院の犬が俺の心臓食っていた

朝の目覚めの悪い日は
キリマンジャロにブランデー
赤い顔して出社して
「二日酔いですか。」

昭和62年 めばえ25号 発表

君は友の恋人

君は友の恋人なのに
その柔らかい胸を僕に押し付ける
僕は裏切りの責めのため
無数の刃を体を受けて
無数の怒りと恨みの刃を投げ返す
朽ちた心之家に帰る
君は豊満な胸でやはり僕を迎える

君は友の恋人
いくら僕を追っても
君は友の恋人
いずれ僕らは離れ離れに
いずれ君は
その胸を震わせて
小さな手でかくす星の瞳から
海のごとき涙にむせぶのだろうか

昭和61年 めばえ23号 発表

画鋏

画鋏は
人差し指を刺した
痛くてきらいだった
抜き捨てておきたかった

画鋏は
斜めに手を伸ばし
片手しか
とどかなかった

画鋏は
天井際で
油がしみて
さびていた

だから
滑った画鋏は
人差し指を
鋭く突き刺した

昭和59年 MY詩集156号発表